

コース用教科書「JPN336：観光サービスのための日本語」の作成過程を振り返って ——教材の作成前・作成作業・作成後——

森 康眞

1. はじめに—経緯

筆者はスィーパトゥム大学（以下、本学）で 1995 年度後期より「JPN432：観光のための日本語（Japanese for Tourism）」の科目を担当してきた。初級レベルの前半部分を終了した学生が対象で、学習時間数は 52 時間弱である（履修時間数）。当時の日本語教材環境では、初級の前半程度を終えた学習者向けの観光関係の市販教科書は皆無に近かった。市販教育教材があっても、観光業務従事者用のゼロ学習者を対象にした入門的ローマ字教科書或いは中級を終了した上級用教科書であった。筆者はこうした環境の中で、P.M.Davidson, H.Uchiyama, and M.Bulmer（1988）, *THE ASIAN STUDIES COUNCIL AND THE AUSTRALIAN TOURISM INDUSTRY ASSOCIATION Japanese For The Tourist Industry INTENSIVE TRAINING COURSE LANGUAGE*, HOSPITALITY PRESS, Melbourne, Australia の入門用ローマ字教科書を参考にしつつ、内容的修正・加筆を行い、漢字仮名混じり文に作り直した自主教材（素材集）を使用していた。教室活動時に配布する語彙・関連語リストや観光地の案内・紹介文の作成も加えつつ、副教材となる周辺教材も順次調べてきた。

しかしながら、2003 年度に始まった学内のコース・デザイン全体の根幹となるコース・シラバス及びカリキュラムの全面的にして大幅な内容の改定は上述の自主教材・副教材では内容的対応ができなくなり、且つ、科目名も新たに変わって「JPN336：観光サービスのための日本語（Japanese for Tourism Services）」となった。学習レベルも初級の 80 パーセント程度を終了した学生を対象とした。旧科目（JPN432）に代わって新科目（JPN336）が開講された 2004 年度前期（8－12 月）に旧教材の見直し・検討・試行を経て、2004 年度後期中（1－5 月）に教科書の作成に取り組み、コース用教科書として一応の完成を見ることができた。2005 年度夏学期（6－7 月）には、非常勤講師がこのコース用教科書を主教材として、2005 年度前期及び 2006 年度前期は筆者が、2007 年度前期は同僚である常勤講師がそれぞれ使用した。

一方、タイ国内の学外の近年の動向に目を向けると、タイ国内を代表する組織であるタイ国日本語教育研究会の 2003 年度第 16 回年次セミナーでの『『みんなの日本語 I』に対応した観光学科対象の観光ガイドの教科書作成について』の発表や 2004 年度第 17 回年次セミナーでのラチャパットの日本語教育を考える会による「観光日本語のシラバス作成について」の発表が見られた（タイ国日本語教育研究会会報 12 月，2005 年 4 月発行）。同研究会の 2007 年 1 月の月例会（第 168 回）では、サイアム大学の千葉真人・高田知仁の両氏が制作した『新 観光ガイド日本語 基礎編（2007 年出版）』という観光ガイド用日本語教科書が紹介された。こうした研究会活動と並行

して、国際交流基金バンコク日本文化センターが編集・発行している『日本語教育紀要』においても「観光事業の日本語」（第 1 号，Seksan, 2004）や『「ラチャパットの観光学科のための観光日本語用シラバス」作成について（第 3 号，長町他，2006）」に見られるように、「観光日本語」を題材とする実践報告が論文として掲載発表されている。

本稿の目的は、筆者が作成した自作主教材としてのコース用教科書の作成前・作成・作成後のそれぞれの段階作業を、一連の作成過程として振り返ることによって、筆者の教科書作りに対する基本的姿勢や基本的取り組みを明らかにすることである。併せて、教授法における教材論の視点に立つ教科書作りの意義や教室現場における教科書の重要性を確認するとともに、今後の教科書作りの指針を得ることである。尚、本稿で論及する教科書とは教育機関内部で便宜的に制作・製本され、且つ、コースの中で主教材として扱われる学習教材であることを予め断っておきたい。

2. 作成化への準備段階—教科書の設計化

2.1 コース・シラバス—学習内容

2003 年度より採用された現教育課程（カリキュラム）の下で設置された日本語コースには、履修形態上、教養学部内の外国語学科英語ビジネスコミュニケーション専攻の学生を対象にした副専攻コース（5 科目 15 単位）、同学部内のサービス産業学科ホテル・観光を専攻する学生を対象にした選択必修科目（4 科目 12 単位）の準副専攻コース、そして他学部の学生を対象にした自由選択科目（2 科目 6 単位）の三つがある。本稿で扱うのは選択必修科目の準副専攻コースに配置されている科目である「JPN336：観光サービスための日本語」についてである。ホテル・観光の専攻課程の中では、職業科目関連である言語技能科目群と位置付けられている。この言語技能科目群には「JPN331：日本語Ⅰ」「JPN332：日本語Ⅱ」「JPN333：日本語Ⅲ」の共通科目と専攻にに応じて何れかを選択する「JPN335：ホテルサービスのための日本語」又は「JPN336：観光サービスのための日本語（以下、観光日本語）」が設置されている。観光日本語の概要は、「観光ビジネスにおいて運用される聞く・話す・読む・書くの各技能に重点を置くことによって日本語の学習と演習を図る」と抽象的な表現で明記されている。具体的には「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」「日本語Ⅲ」の 3 科目で初級全体の 80 パーセントを終了するシラバス構成で、所謂、構造シラバス（文法・文型の体系的な積み上げ学習）を中心とする教科内容である。詰まり、全般的な日本語能力の養成・向上を図ることに主眼が置かれる（一般日本語教育）。これに対して、「観光日本語」の科目は、「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」「日本語Ⅲ」で履修学習した日本語の体系的知識と運用力を確認（復習）しつつ、場面・話題・機能シラバスを基軸に語彙と表現の習得を通じて、観光実務に必要な日本語による言語活動と言語行動を可能にすることを目的とする個別的対応教科である（専門分野別日本語教育）。言わば、初級の既習語彙・文法・文型を最大限に使うようにしながら、観光日本語に必要な語彙・表現を累増的に学習する方法である。

観光日本語という個別分野或いは目的別の日本語学習では、学習者の学習目的や日本語の実際的使用場面と場所を考慮することが求められる。この点で、体系的な学習から優先的な学習への転換が必要となろう。この優先的な学習を特徴付けるには、場面、話題、機能、概念等のコミュニケーションに重点を置いたシラバスが望まれる。基本的には場面を重視するシラバスの展開を検討するとした。特に、対話場面での情報のやりとり（例えば、ガイドとツアー客との対話）に比重を置くことによって、場面とコミュニケーション行動を直接的に結び付ける実用的アプローチを採った。このアプローチの中で、話題・機能・概念も併せて検討するとともに、上述の共通科目で学習された全般的な日本語能力を統合させる方法も探った。

2.2 コース・カリキュラム—学習活動

本学のコース・スケジュールは、通常の学期の場合、16週を以って構成される。この16週の内、8週目と16週目は中間試験と期末試験がそれぞれ充てられるので、実質の授業は14週分となる。1週につき、2ピリオド（2コマ）の授業時間数であるが、1ピリオドは110分で、110分の授業を2ピリオド行うということになっている。この1週に与えられた2ピリオドは1回目を理論（Theory；T/2単位）とし、2回目を実技（Laboratory；L/1単位）として捉えている。夏学期の場合は、通常学期の半分となる8週で構成される。1週当たりの授業時間数も通常学期の2倍である4ピリオド（4コマ）となる。中間試験と期末試験も実施される。

2.3 教材分析—作成方針・作成枠組み固め

具体的な教材作成に取り組むことを念頭に「観光日本語」を内容とする教材の検討作業を始めた。この検討作業は既存の教材分析を詳細に考察することで、教材作成の手懸り、方針、枠組み等を得るためでもある。具体的な考察と詳細な分析は、会話（対話）文の題材、会話文における語彙、文法、文型や表現、練習問題、各課の内容構成、全体的な構造を対象とした。言わば、教科書作りとなる教材作成に関わる情報収集作業となる。以下は検討作業の際に参照した教材である。

- คาฐุมิ ศรีจักรวาท · ปราวณี จงสุจิตรธรรม · Kiyoshi Nakashima · Takeshi Yoshida · Takako Abe · วีรวรรณ วชิรดลก · Hisako Takada (2544) 『ภาษาญี่ปุ่นภาคฤดูร้อน1 ガイドの日本語 1』สำนักพิมพ์ภาษาและวัฒนธรรม สมาคมส่งเสริมเทคโนโลยี (ไทย - ญี่ปุ่น)
- คาฐุมิ ศรีจักรวาท · Takako Abe · ปราวณี จงสุจิตรธรรม · วีรวรรณ วชิรดลก · Kiyoshi Nakashima · Hisako Takada · Takeshi Yoshida (2537) 『ภาษาญี่ปุ่นภาคฤดูร้อน2 ガイドの日本語 2』สมาคมส่งเสริมเทคโนโลยี (ไทย - ญี่ปุ่น)

上記の教材は場面・話題シラバスを考える足がかりとなった。学習レベルは初級を対象にしている訳ではないが、モデル会話で使用される語彙や表現は、学習項目を検討する際の参考とした。タイ国内の学習者を対象にした教材なので、ガイドに求められる場面・話題の対話例を考える素材ともなった。筆者の教科書に掲載したタイを説明する重要語彙（227語・タイ語 - 日本語）は、

同書巻末に付されている索引から作成したことを付記する（表1参照）。

- สุภัฒ สงวนดีกุล・ไพฑูริ สุขสมหมาย・วรินทร์ สุขเจริญ・จันทนา อารยสมบูรณ์・วีรวรรณ วชิรดิลก・Kiyoshi Nakashima・Hisako Takada・Shuzo Yanase・Mari Hosaka (2536) 『ภาษาญี่ปุ่นธุรกิจ1 ビジネス日本語 1』 สมาคมส่งเสริมเทคโนโลยี (ไทย - ญี่ปุ่น)

観光日本語とは直接関係する訳ではないが、敬語表現の文例や表現の種類を考える参考となった。加えて、表現の練習についても練習の形式と方法を考案するのに有益であった点を付記しておきたい。

- 呂青華編著（1999）『易學即用 觀光旅館日本語』大新書局

台湾で出版された教材である。ホテル業務に関する日本語を扱ったものであるが、学習レベルは初級後半部分の項目も見られるが、初級前半程度を終えた学習者でも対応できる教材と思われる。モデル会話が簡潔に紹介され、語彙（含慣用句）や表現（含文型）の提示、対話及び表現練習、聴解問題、関連語彙を補足単語として追加する等で、各課の構成が見易く、教室での学習でも使用できる教材と思われる。特に各課の構成内容は参考となるところ十分であった。

- 矢野義憲編著（1999）『中日對照・原文標音 最新觀光商用日語會話』大新書局

同じく台湾で出版された教材であるが、日本語の基礎となる初級の知識を身に付けた学習者向けと言える。ホテル・レストラン・土産屋・免税店など観光全般を取り扱った教材である。解説や練習問題はない。モデル会話で使われている文例は、初級程度の学習者を対象にする会話文を書き下ろす場合の参考となった。

- 木本壽美恵（1995）『觀光日本語』チャチェンサオ教育大学（現ラーチャパット大学チャチェンサオ校）

市販教材ではないが、国際交流基金バンコク日本文化センター内の図書室で閲覧した製本教材である。初級前半を終了した学習者を対象にしているが、ひらがなとカタカナの表記のみで漢字を一切使用していない。各課は、新出単語、会話文、語句・文型・表現を一括にした文法の説明、例文集に区分された構成となっている。場面・話題に基づく会話文からの語句・文型・表現の抽出例は、学習ポイントの明確化と相俟って、参考にすべき点多々あった。

- วีรวรรณ วชิรดิลก・Sachiko Ogasawara (1998) 『ภาษาญี่ปุ่นอย่างง่าย ชุดเดินเที่ยวกับคนญี่ปุ่น ยาสี
い日本語 日本人をタイに迎えて』泰日經濟技術振興協會付属語学学校

テープ付属の教材図書で、筆者は聴解用の教材として活用することにした。活用した理由は、筆者個人での聴解教材の作成が難しいと判断したからである。但し、スピーチ・レベルの面では丁寧体を基調とするものであるが、テープ中の日本人の発話形式と内容は観光日本語に相応しいものと考え、同書の第5課～第12課の会話文を聴解練習用に演習形式として再教材化した（4.3.1参照）。

この他、ウェブサイト上の各ページにおいても幾つか参考となるものがあつたことを付け加え

ておくとともに、日本人向けのタイ語の学習書や信頼できる観光案内書（ガイドブック等）からは、観光に関わる語彙や言い回し等、観光に必要な知識や情報を得られる手段となった点も付記しておきたい。

3. 作成過程における作業—シラバス及びカリキュラム・デザインに基づいて

教科書の作成を実際に進める作業では、三つの視点に留意した。即ち、1) コース・スケジュール（時間的枠組み）に沿って、2) 授業計画に即して、3) 既習項目（語彙・文法・文型）との関連性と新出事項（語彙・表現）との整合性、である。これら三つの留意点はコース・シラバスとカリキュラムを具体的に詰める作業とも言える。

まず、教科書全体の骨格となる構成要素を決めた。構成要素とは、接客に関わる慣用表現（定型句）、学習する課（学習目的・モデル会話・新出単語・敬語の確認、表現練習・関連単語・漢字表）、敬語（尊敬語・謙譲語・改まり語）の解説、観光地（地域・地点）、聴解である。次に、構成要素に従って、筆者自ら書き起こした。書き起こし作業の過程で、学習語彙や学習表現の抽出、既習項目との関連付け、新出事項のリスト化、学習の要点化等を書き置きしながら、作業を進めた。最後に、項目及び内容の重複度や頻度を見返すことで、全体的な調整と整合を行った。

4. 作成した教科書の構成及び内容—教科書の特徴

4.1 教科書の構成—コース・シラバスに準拠して

コース・シラバスは「学習すべき細目の一覧表」を指すが、作成した教科書の全体的構成はこれを踏まえたものとなっている（表1）。

表1 教科書の目次内容

はしがき	第11課 ツアーの説明
目次	第12課 ツアーの案内
コーススケジュール	第13課 ツアー先でのトラブル
あいさつの表現	第14課 打ち合わせと報告
【基礎編】第1課 入国審査	敬語（尊敬語・謙譲語・改まり語）
第2課 荷物の受け取り	タイという国（A～F）
第3課 ツアーの問い合わせ	聞く練習（1～8）
第4課 ツアーの予約	観光地の説明（A～H）
第5課 航空券の予約	プロジェクト（1・2）
【応用編】第6課 空港のチェックインカウンター	クイズ
第7課 旅行代理店	セルフ アクセス ラーニング
第8課 空港の免税店	タイを説明する言葉
第9課 お客様のお迎え	参考文献
第10課 ホテルで	

4.2 教科書の内容—コース・カリキュラムに準拠して

コース・カリキュラムはコース期間内の授業時間の配分（週110分×2ピリオド＝220分の14週分）、授業内容の時間配分（110分＝1ピリオドの流れ）、教科書の進度（2ピリオドで1課の学

習)、評価(定期試験)の時期を指す。こうしたカリキュラムの各要素をスケジュール化したものが以下の表である(表2)。と同時にこのスケジュール化はコース・シラバスの内容的項目を配列化する過程でもある。

表2 コース・スケジュール

語彙数は全体で、1168語であった(異なり語数)。この1168語は既習語彙と新出語彙との合計であるが、第1課から第14課までの総語数は691語で、この内、既習語彙は358語で、新出語彙は333語であった。第1課から第14課までの全課を除く他の部分で使用されている語彙数は、692語で、既習語彙数383語、新出語彙数309語

第1週	第1課 入国審査	聴解1 タイスキ	T
		タイという国 A バンコク	L
第2週	第2課 荷物の受け取り	聴解2 お坊さん	T
		タイという国 B パッタヤー	L
第3週	第3課 ツアーの問い合わせ	敬語(尊敬語)	T
		タイという国 C アユッタヤー	L
第4週	第4課 ツアーの予約	プロジェクト1	T
		タイという国 D チェンマイ	L
第5週	第5課 航空券の予約	敬語(謙譲語)	T
		タイという国 E プーケット	L
第6週	第6課 空港のチェックインカウンター	敬語(改まり語)	T
		タイという国 F スコータイ	L
第7週	第7課 旅行代理店	聴解3 エメラルド寺院	T
		タイの観光地 A 王宮	L
第8週	中間試験		
第9週	第8課 空港の免税店	聴解4 乗り物	T
		タイの観光地 B エメラルド寺院	L
第10週	第9課 お客様のお迎え	プロジェクト2	T
		タイの観光地 C 暁の寺	L
第11週	第10課 ホテルで	聴解5 チェンマイ観光の感想	T
		タイの観光地 D 黄金の山寺院	L
第12週	第11課 ツアーの説明	聴解6 買い物	T
		タイの観光地 E 黄金仏寺院	L
第13週	第12課 ツアーの案内	聴解7 タイダンス	T
		タイの観光地 F ジム トンプソン	L
第14週	第13課 ツアー先でのトラブル	聴解8 別れ	T
		タイの観光地 G ムアン ボーラン	L
第15週	第14課 打ち合わせと報告		T
		タイの観光地 H ローズガーデン	L
第16週	期末試験		

であった。尚、課全体で提示されている語彙数691語と全課以外で提出されている語彙数692語の総計は1383語となり、上述の語彙総数1168語と異なるのは、全課とそれ以外の部分で重複する語彙を含んだ延べ語数と解されたい。加えて、定型化した表現の延べ数については、41になった。各課に三つずつ提示している配分である(第14課のみ二つ)。教科書で使用されている漢字は常用漢字に基づく表記を用い、漢字には振り仮名を全てに振った。

4.3 教科書の使い方と進め方—教室活動に準拠して

4.2 のカリキュラムを各授業毎に具体的且つ円滑的に実施するものを授業計画^{レッスン・プラン}と称するが、作成した教科書の使用方法を例示するべく、授業(教室活動)案の原型を以下に詳述したい。具体的な教室活動の手順や技術の言及は教授法の観点を含するものと考えられている。

4.3.1 前半 (T) の授業 (110 分=1 ピリオド)

各課の「D. 文の練習 (資料参照)」で使われている主な単語についての発音練習や意味の確認をした上で、「D. 文の練習」を行う。この「文の練習」とは、表現の練習を指し、三つの表現を「A. 会話」の中から抽出したもので、各表現にはそれぞれ 4 問の練習問題を付している (第 14 課の表現は二つのみ)。練習問題の方法は、代入練習、付加練習、結合練習、変形練習と呼ばれる各種ドリルである。この表現練習には、敬語・慣用表現の学習に止まらず、既習の文型的要素も含まれた表現 (表現の定型) も加えられている。何れにしても、表現の練習は既習・未習の語彙に関わらず、表現の使用の可能性を拡大することにあるのは言うまでもない。次に、「E. 言葉」は課に関連する追加語彙の学習である。この後は、聴解の練習となる。聴解はタスク形式 (助詞の穴埋め、語句の穴埋め、文の並べ替え) で進められる。聴解の練習がない場合は、敬語の演習やプロジェクトワークの説明を入れている。

4.3.2 後半 (L) の授業 (110 分=1 ピリオド)

各課で扱われている学習行動目標を理解した上で、「A. 会話」から抜き出した「B. 新しい言葉」の学習に入る。そして、モデル (本文) 会話である「A. 会話」の学習を進める。この学習の後には、対話形式の口頭による運用練習を行う。次に、「C. 敬語 (尊敬語・謙譲語・改まり語)」の確認問題を通して、丁寧体と待遇表現の認知学習を行う。最後に、「F. 漢字を読んで、意味を書きましょう」の項に触れることで、漢字を中心とする語彙の蓄積を図る。これによって各課の学習を終えるが、更に、語彙や文型の定着を目的とする「読解演習問題」も行う。この「読解」は「タイという国」を 6 つの地域で分けた「読解」と、バンコク都内 (6 箇所)・バンコク近郊 (2 箇所) の代表的な「タイの観光地」8 箇所を取り上げた「読解」の練習問題となっている。読解は上述の聴解と合わせて、使用語彙と理解語彙を含めた語彙力の向上に資するものと思われる。

5. アンケート調査—履修学生の受け止め方

2007 年度前期に当該科目を履修する学生の教科書に対する受け止め方を知るべく、コース終了直前の授業時間内に 5 つの設問を記載した無記名式アンケート調査を実施した (表 3)。アンケート形式はプリコード回答法で、単一回答 (5 項選択) 形式を採った (質問 5 については 3 項目選択形式と文字記入回答形式を組み合わせた)。回答した学生の総数は 32 名であった。

表 3 アンケート調査の結果

	非常に そう思う	そう思う	余り そう思わない	そう思わない	わからない
1.教科書の内容は 科目に相応しいか	8 名 (25.00%)	24 名 (75.00%)	0 名 (0.00%)	0 名 (0.00%)	0 名 (0.00%)
2.教科書のレベルは 難しいか	3 名 (9.37%)	25 名 (78.13%)	3 名 (9.37%)	0 名 (0.00%)	1 名 (3.13%)

3.教科書は使い易いか	1名 (3.13%)	24名 (75.00%)	6名 (18.74%)	1名 (3.13%)	0名 (0.00%)
4.教科書に満足しているか	10名 (31.24%)	21名 (65.63%)	1名 (3.13%)	0名 (0.00%)	0名 (0.00%)
5.改善点があるか	ある	ない	わからない	無回答	
	10名 (31.24%)	19名 (59.38%)	2名 (6.25%)	1名 (3.13%)	

(括弧内の％は小数第三位以下を四捨五入した数値である)

程度を問う質問は回答者によって解釈基準が異なってくる可能性が否めないが、およそその全体的な傾向を把握すると、教科書の内容は教科の履修内容と一致すると考える学生は 100%であった。しかしながら、教科書のレベルの難しさでは全体の 87.51%を占める 28名の学生が難しいと感じている。内容的には適切であるが、学習レベル的には難しいと認識していることが窺える。他方、作成教科書を使用しての学習に対する満足度では、全体の 96.87%を占める 31名の学生が満足であると回答した。これに対して、教科書を使つての学習上の使い易さについては、回答のばらつきが見られた。即ち、使い易いと肯定的に考える 78.13%の学生 (25名) と使い易いと考えていない否定的な 21.87%の学生 (7名) が見られた。これに関連するように教科書の改善点の有無を問うた質問の中で、あると回答した学生も 10名が見られ、31.24%であった。改善点について自由回答された文字記入を見ると、漢字の文字が小さく見にくい、内容が多い或いは多すぎる、漢字の学習量や文法事項が多い、話す (会話) 練習を増やして欲しい、等の意見が寄せられた。教科書の学習内容・レベル・範囲を視野に入れた改訂は何れ検討するにせよ、使い易さと改善点については早急に見直す必要があるように思われる。

6. 終わりに一良い教材作りを目指して

教材の中心的存在である教科書は具体的な教育 (指導・学習) 内容を明示するとともに、教育活動の主軸的役割を果たすものと考えられる。と同時に、教科書の良し悪しは学習者－教師－教育機関の各主体のニーズとの相対的な関係の中で判断されるものとも考えられる。こうした各ニーズを見極めた上で、コースにおける各教科に選定可能な市販の既成教材で個別的対応ができない場合、学習者が必要とする教材の作成には、主教材の決定に関わるコース・デザイン (何に基づき) や指導・学習内容に関わるシラバス・デザイン (何を) や授業計画で示される具体的な教室活動に関わるカリキュラム・デザイン (いつ・どのように) の個別的・総合的検討が大切となる。こうした検討を経て作成された教科書は、学習目標や到達目標との照合や教科書の質的妥当性を検証する必要があるものの、教科における指導・学習の体系性・計画性・継続性・安定性を出力化する一方で、教室活動を充実させる方向性を入力化させるものでもある。この教室活動を充実化させる努力は、教科書を補完又は拡充するべく、副教材や補助教材となる周辺教材の作成という形で現れるものと思われる。

教材作成には、教材の形態・種別が如何なるものであれ、教材の研究や教材を分析する方法論や分析－作成－使用－評価の観点を含めた教材開発論の知見を必要とするのは言うまでもない。

その点で、筆者の教材作成能力（知識・技術・経験）は依然として未熟であることを自認しつつも、今後のより良い教材－コースにおける教室内の学習者が学習・到達目標に向けて安心・信頼・期待できる、且つ、学習動機・学習達成度が高められる－の作成に向けた更なる研究と実践を意欲的に取り組み続けたいと思う。

参考文献

- エフィルシアナ・山下美紀・森本由佳子（2006）「インドネシアの専門高校観光部門観光サービス業務専攻用日本語教科書『インドネシアへようこそ』作成報告」『国際交流基金 日本語教育紀要』第2号、pp.121-126
- 岡崎敏雄（1989）『日本語教育の教材－分析・使用・作成（NAFL選書）』アルク
- 岡崎敏雄・川口義一・才田いずみ・畠弘巳（1992）『ケーススタディ日本語教育』おうふう
- 島田徳子・柴原智代（2005）「日本語教材作成のための三つの視点－教授設計論の適用、学習過程への注目、教室活動の分析指標－」『国際交流基金 日本語教育紀要』第1号、pp.53-67
- 高見澤孟監修（1997）『はじめての日本語教育〔基本用語事典〕』アスク講談社
- 田中望（1988）『日本語教育の方法－コース・デザインの実例－』大修館書店
- 日本語教育学会編（1990）『日本語教育ハンドブック』大修館書店
- 三牧陽子（1996）『日本語教師トレーニングマニュアル⑤ 日本語教授法を理解する本 実践編』バベル・プレス
- ラクトマナナ アンビニンツア スルフニアイナ（2006）「マダガスカル人日本語ガイドのための『観光日本語』シラバス作成」『日本言語文化研究会論集』第3号、国際交流基金日本語国際センター・国立国語研究所・政策研究大学院大学、pp.277-302

資料 作成した教科書の実例（紙幅の関係上、部分的に割愛した）

- 第6課 空港のチェックイン カウンター
- 空港にある航空会社のチェックイン カウンターでの会話です。空港は静かな所じゃないので、大きい声で、はっきり話さなければなりません。空港はうるさいので、お客様が話す日本語も聞こえないかもしれません。[以下、省略]
- A. 会話 X：お客様 Y：航空会社の人
- Y：航空券とパスポートを拝見致します。
- X：はい、どうぞ。
- Y：機内にお預けになるお荷物をこちらにお載せください。
- X：はい。
- Y：お客様、そちらは機内持ち込みのお手荷物ですか。
- X：ええ、そうです。
- Y：お座席は 窓側と通路側とどちらがよろしいですか。

X：通路側のほうがいいです。

Y：かしこまりました。少々、お待ちください。

Y：お待たせ致しました。こちらがご搭乗券でございます。[以下、省略]

B. 新しい言葉

1. 航空券
2. 機内
3. 預けます／Ⅱ
4. お荷物
5. 載せます／Ⅱ [以下、省略]

C. 敬語（尊敬語／謙譲語／改まり語）

1. 見ます → 謙譲語（ ）
2. 預けます → 尊敬語（ ）
3. 載せてください → 尊敬語（ ）
4. ここ／そこ → 改まり語（ ）
5. いい → 改まり語（ ） [以下、省略]

D. 文の練習

あ) 機内に（預ける）お荷物 → 機内にお預けになるお荷物

1. お客様が（持つ）お手荷物 →
2. お客様が（乗る）飛行機 →
3. お客様がチェンマイで（買った）お土産 →
4. お客様がお部屋に（忘れた）財布 →

い)（載せて）ください。 → お載せください。

1. （使って）ください。 →
2. （確かめて）ください。 →
3. （選んで）ください。 →
4. （戻って）ください。 →

う) こちら／ご搭乗券 → こちらがご搭乗券でございます。

1. そちら／入り口 →
2. あちら／おトイレ →
3. こちら／ツアーの予定表 →
4. そちら／ツアーの申し込み書 →

E. 言葉

席 1. 禁煙席 2. 窓側の席 3. 通路側の席 4. 右側の席 5. [以下、省略]

何時 1時 2時 3時 4時 5時 6時 7時 [以下、省略]

何分 1分 2分 3分 4分 5分 6分 7分 [以下、省略]

半 = 30分

F. 漢字を読んで、意味を書きましょう。

1. 航空券
2. 拝見致します
3. 機内
4. お預けになる
5. [以下、省略]